

〈原著〉

フランシス・ベーコンにおける交感 (sympathy) に触れる実験の視野

— 自然の過程の現代の医学、生理学、心理学のレンズを通しての検証 —

藤 井 義 博 (藤女子大学保健センター)

本論文は、哲学者フランシス・ベーコンの最後の著作である“シルバ・シルバルムすなわち自然誌”の10世紀の主要なテーマである交感 (sympathy) に触れる実験のうち夢で死を予知する近親者間の交感、疣を擦った豚の皮脂片を消耗、腐敗させることで疣が退縮する物と物の間の交感、剣による創傷がその剣への軟膏塗布で治癒する物と物の間の交感に触れる各実験の自然の過程 (natural processes) を、現代の医学、生理学、心理学のレンズを通して検証する試みであった。

ベーコンが実験 (experiment) と名づけて実践したことは、神の仕業および神のランプである感覚に基づくことにより、迷信と魔法のアートと観察から、明晰で純粋な自然の過程すなわち外的環境に関わる外的な自然の過程および人の内部環境に関わる内的な自然の過程を分離することであった。検証の結果、夢で死を予知する近親者間の交感に触れる実験の自然の過程は、C.G. ユングによる無意識の知覚すなわち共時性 (synchronicity) が機能する無意識の過程であり、疣が退縮する物と物の間の交感に触れる実験の自然の過程は、炎症反応の増強による免疫反応の賦活およびプラセボ効果であり、剣による創傷がその剣への軟膏塗布で治癒する物と物の間の交感に触れる実験の自然の過程は、現代の湿潤療法が採用している湿潤環境の形成であると理解することができた。また再使用された軟膏の徳性 (virtue) の増加は、S.W. ポージェスのポリヴェーガル理論における無意識の脳覚 (neuroception) を礎とするプラセボ効果の予想であると理解することができた。ベーコンは、物事は徹底的に吟味すること、そしてしかるべき吟味を経るまでは、信用できるからといって受容しないこと、ありそうもないからといって拒絶しないことを自らの法則として自らに設定するとともに実験者の恣意性の指摘、客観的で正確な叙述、科学的検証の指摘を厳格に実行することにより、現代の医学、生理学、心理学のレンズを通しての検証が可能な客観的記述としての自然の過程を後世に遺すことができた。

キーワード：共時性、集合的無意識、湿潤療法、プラセボ効果、ポリヴェーガル理論

1. はじめに

諸科学の再構築を目指した英国の哲学者フランシス・ベーコン (1561-1626) による“シルバ・シルバルムすなわち自然誌” (Sylva Sylvarum: or a Natural History) は、ベーコンの死の1年後の1627年に彼のチャプレンのE. Rawleyによって刊行されたベーコン最後の著作であり、ベーコンの厳密な方法により客観的に記述された自然の過程の集成である。ベーコンの自然哲学の特徴は、自然の過程をそれ自身に含まれている不可視物によって支配されていると把握するこ

とにあった¹⁾。この不可視物は、ベーコンがスピリットと呼ぶ、能動的な人格としての原初物質からなる複合物質として物質に内在し、身体の内発的な主体性になう存在であった。ベーコンが記述した自然の過程は、人を取り巻く外的環境すなわち外的な自然の過程だけでなく、人の内部環境である心の自然すなわち内的な自然の過程でもあった。そして自然の過程は、人ではなく神がつくったままの世界であり、人の想像 (imagination) が排除されることすなわち人の偽装による隠蔽と人の規律による抑止とが取り除かれたときに見出される世界であった²⁾。想像に対決する方法と

して、神の仕業および神のランプである感覚に基づくこと、自然の経過の中に侵入する想像の言葉である非物質的効力 (immaterial virtues) を排除すること、自然の経過に及ぼす想像の力の帰結を分離することをベーコンは挙げた¹⁾。

身体の内発的な主体性を担う物質的存在であるベーコンのスピリットは、17世紀を支配する物理学に沿った思考すなわち外からの力に作用される受動的物質 (passive matter) という思考の外にあった³⁾。しかしながらその後の生物医学 (biomedicine) の進展が示すように、無意識の過程を含む人体の生理学的過程が次第に解明され理解されるようになったことから、ベーコンのスピリットのアイデアは内発的な主体性の起源として歴史的に位置付けることができる。実際、人のスピリット全般が有している交感 (the general sympathy of men's spirits) すなわち人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びが人の自然にとって気持ちよく心地よいものとして人々のスピリットの間にみられることのベーコンによる気づきは、自律神経系機能と社会的関わりという高次脳行動を序列的にリンクする理論である S. W. ポージェス (1945～) のポリヴェーガル理論⁴⁾の予想であるととらえることができる¹⁾。

本論文は、“シルバ・シルバールムすなわち自然誌”の10世紀すなわち第10章の主要なテーマである交感 (sympathy) に触れる実験 (experiment) のうち、夢で死を予知する近親者間の交感、疣を擦った豚の皮脂片を消耗、腐敗させることで疣が退縮する物と物の間の交感、剣による創傷がその剣への軟膏塗布で治癒する物と物の間の交感に触れるそれぞれの実験の自然の過程を、現代の医学、生理学、心理学のレンズを通して検証する試みであった。

2. 資料と翻訳

“シルバ・シルバールムすなわち自然誌” (*Sylva Sylvarum: or A Natural History*) のテキストは COLLECTED WORKS OF FRANCIS BACON. Volume II Part I, Part II (Routledge/Thoemmes Press, London, 1996.) を用いた。これは、The Works of Francis Bacon (collected and edited by James Spedding and Robert Leslie Ellis, and Douglas Denon Heath, 1879) のリプリント版である。“シルバ・シルバールム”からの引用は、(SS) で示しかつパラグラフ番号で示した。

上記の資料からの引用の日本語訳は、すべて著者による。

3. “シルバ・シルバールムすなわち自然誌”の10世紀の構成と内容と目的

“シルバ・シルバールムすなわち自然誌”は、観察された自然の過程についての通し番号の付された1,000のパラグラフから構成されている。そしてこの1,000のパラグラフは、それぞれ100パラグラフずつ含む1世紀 (Century I) から10世紀 (Century X) までの10章に括られている。各世紀は、実験 (Experiment) で始まるタイトルが付けられた1ないし数パラグラフからなるセクションに分けられており、セクションによっては長短のコメントが付けられている。

すべてのタイトルが共通して実験と名付けられていることは、物事は徹底的に吟味すること、そしてしかるべき吟味を経るまでは、信用できるからといって受容しないこと、ありそうもないからといって拒絶しないことを自らの法則として自らに設定していた (SS 911) ベーコンのモラルを反映している。ベーコンによる自然誌 (natural history) は、それまでの自然誌やまた19世紀に生物学が誕生するまでは優勢な概念であった人が作った人工物と対立する自然現象を扱う自然誌ではなく、実際的な実験誌であったことが指摘されている⁵⁾。

4. 非物質的効力と想像の力の伝播と流入に触れる実験

この実験が10世紀の最初の実験であることには理由がある。不可視物であるスピリットが支配している自然の過程には想像の力も及んでいるため、自然の過程を分離するには、非物質的効力と想像の力について述べる必要があったからである。

想像は個人の思考の再現であると理解していた (SS 945) ベーコンは、非物質的効力と想像の力は、当時の人々の常識の源泉であったパラケルススなどの錬金術やそれに基づく自然魔術 (注：自然の力を用いて超自然的と思われるような効果をもたらす技) における想像の力と関わることから、非物質的な効力と想像の力には歴史的な由来があることを指摘している。すなわち古代ギリシアのピタゴラスに始まり、プラトン、ティアナのアポロニウスを経て spiritus mundi (宇宙靈魂、世界靈魂) を生み出したこと、それに小宇宙 (microcosm) と呼ばれる人のスピリット (the spirit of man) が強い想像と信念によって適切に触れるならば自然を支配し得ると言う者もあること、そしてパラケルススなどの自然魔術者は奇跡を起こす信念を至高の想像に帰していることについて述べている。

ベーコンは、世界靈魂と小宇宙は、自然の過程ではなく、想像であると理解していた。そして想像と対決する方法として、神の仕業および神のランプである感覚に基づくこと、自然の経過の中に侵入する想像の言葉である非物質的効力を排除すること、不可視物であるスピリットが支配している自然の経過に及ぼす想像の力の帰結を分離することを挙げている¹⁾。この想像の力と対決する方法によって、迷信と魔法のアートと観察から、明晰で純粹に自然であるものすなわち自然の過程を分離して記述することが、10世紀における各実験におけるベーコンの目的であった。

5. スピリットと想像の力の伝播に触れる実験

この10世紀の2番目の実験においてベーコンは、スピリットと想像の力の伝播の特徴である不確実性について次のように指摘している。

スピリットと想像の伝播は、時には効果をもたらさないゆえに、それらの作用から信用をひきださないよう人々は警告されるべきである (SS 901)。

どうしてベーコンはスピリットと想像の力の伝播を分けることなく一括して扱っているのだろうか。本章では、その理由をC.G. ユング (1875-1961) の無意識のレンズを通じて検証した。

スピリットと想像の伝播がときには効果をもたらさない例としてベーコンは、ペストなどでの身体から身体への感染 (infection) と伝染 (contagion) は、受動的な身体 (body passive) では受容されるが、頑強な身体やよい管理能力によっては撃退され払いのけられてしまうことを述べている。これは、光学顕微鏡による細菌などの病原体の発見される前の感染や伝染という自然の過程における宿主側の感染抵抗力すなわちレジリエンスのアイディアの表明である。またベーコンは、心から心へあるいはスピリットからスピリットへの印象は、女性、病人、迷信深くびくびくしている人、子どもと幼児などのような弱い心とスピリットにおいて最も作用し、また王や行政官に対する印象の弱さは想像する側の想像力の弱さによるかもしれないと述べている (SS 901)。このようにベーコンは、スピリットと想像の力の作用の不確実性は、それらの送り手と受け取り手の間の能力の相対的な強弱にあると理解していた。

一方、C.G. ユングは、20世紀において発展した量子力学の諸発見を背景として、一般に自然の過程は決

定的ではないこと、すなわち自然の過程における原因と結果の関係は論理的な必然性ではなく蓋然性であることを次のように述べている：「よく知られているように、現代物理学の緒発見は、自然法則の絶対的な正当性を打ち砕いてそれを相対的にしたことにおいて、世界についての科学的なイメージに重大な変化をもたらした。自然法則は統計学的真実であり、自然法則はマクロの物理量を扱うときにのみ完全に正当であることを意味する。ごく少量の領域においてはごく少量はもはや既知の自然法則と一致した振舞いをしないことから、予測は不可能でないとしても不確実となる。」⁶⁾そして自然法則における因果関係 (causality) が確率的な正当性であるならば、因果関係は因果関係以外の一つないしは二つ以上の自然の過程の説明要因の存在を前提しているとして、自然の過程における関係には意識の論理である因果関係 (causality) のほかに、無意識が知覚する共時性 (synchronicity) という関係があることをC.G. ユングは指摘している。そしてベーコンが王や行政官に対する印象の弱さは想像する側の想像力の弱さによるかもしれないと述べた人間関係における自然の過程に関しては、「人は元型に伴う独特の畏敬の念—元型から発散する魅力ないしは魔力—を感じる時に元型 (引用者注：集合的無意識における元型) の特異的なエネルギーを経験することができる」と述べている⁶⁾。

自然の過程を意識における因果関係でのみ捉えたベーコンはスピリットと想像の力を分けることができなかつたが、自然の過程を意識と無意識の過程に分けたC.G. ユングは、意識における因果関係と身体の解剖生理学的自然に礎をもつ心性である集合的無意識⁷⁾の元型の伝播という無意識における共時性とに分けることができた。

6. スピリットと想像の伝播の分類

不可視物であるスピリットが支配している自然の過程には想像の力もまた作用していると理解していたベーコンは、スピリットと想像の伝播による作用の性質として、接触することなく距離を保って作用すること挙げている (SS 903)。そしてこれらを8種類に分類している。

ベーコンによるスピリットと想像の8種類の伝播は、病原体と臭い分子の伝播 (第1種類)、物理化学的物質の伝播 (第2種類、第3種類、第4種類、第6種類)、自然魔術者が取り込んで技や指針としている共感 (第7種類)、心理学的かつ神経生理学的な伝播 (第5種類、第8種類) の4つに括ることができる。

以下、この4つの括りにおいて8種類の伝播を検討した。

1) 病原体と臭い分子の伝播 (第1種類)

第1種類は、臭いや感染のように物体の希薄で空気のような部分である。この指摘は、光学顕微鏡を用いた観察によって感染の要因としての細菌が同定される以前にペーコンは、感染要因は臭いとは異なるが臭いのような物質的要因であると理解していたことを示している。

2) 物理化学的物質の伝播 (第2種類、第3種類、第4種類、第6種類)

第2種類は、見えるものや音など、崇高な形質と呼ばれているものである。ペーコンは見えるものや音すなわち可視光線と可聴域の音波について、すばやくかつ遠くまで移動するが、そのためには媒体を必要とすること、そしてそれらの伝播は容易に遮断されるという物理学的な特徴を指摘している。

第3種類は、静電気、熱、石油揮発物の引火など離れたところのある定まった物体を引きつけるものである。

第4種類は、スピリットや非物質的な力と効力である。その例として、磁力、引力、重力などが挙げられている。

第6種類は、熱や光に加えて天体からの流入物である。

3) 自然魔術者が取り込んで技や指針としている交感 (第7種類)

第7種類は、自然魔術者が取り込んで技や指針としている交感である。これについてペーコンは次のように説明している。

人に対して何か効力や傾向を付加的に導入しようと望むなら、その効力が際立っていて完全である生物を用いる必要があり、その動物において当該の効力が主に備わっている部分を用いる必要がある。さらに当該の効力が最も発揮されている時と行為における当該部分を用いる必要があり、そしてそれを人の当該の効力が主に備わっている部分に当てる必要がある。もしあなたが勇気や強靭さを付加的に導入したいなら、獅子や雄鶏を用いて、獅子の心臓、歯、足や雄鶏の心臓、蹴爪を用い、獅子や雄鶏が戦った直後の当該部分を用いて、それらを人の心臓や手首にまといつける必要がある (SS 903)。

このパラグラフにおいてペーコンは、自然魔術者が用いている物と物の間における交感を人に導入するための生物、部分、時、行為などの条件を挙げているが、何もコメントをしていない。しかし、後述する交感の実験 (SS 998) においては、これらの条件は治療が無効のときの「抜け道」すなわち巧妙に組み込まれている言い逃れであるとペーコンは見立てている。

4) 心理学的かつ神経生理学的な伝播 (第5種類、第8種類)

第5種類は、他者の心のスピリットに作用する人の心のスピリットである。ペーコンは、人の心のスピリットによる他者のスピリットへの作用が激しいときは、感情の作用となり、また強いときは想像となるという二重の性質があること、この2つは一对となることから妬みや恋が他者のスピリットに感染すると、感情と想像が一緒になることを指摘している。上述したように、ペーコンによる実験の目的は、想像の力の作用を排除することで不可視物であるスピリットが支配している自然の過程を分離することであった。しかしスピリットの作用は感情、想像、感情プラス想像の三者となる性質があるという指摘は、厳密な方法なくしては人の内部環境に関わる内的な自然の過程の分離は不可能であることを示唆している。

第8種類は、非物質的な効力すなわち物と物の間における交感である。これについてペーコンは、提出するにはすこし疑念があることを表明して次のように述べている (SS 911)。

それは驚異的なことであるが、多くの人々によって不断に真実であると主張されているので、以下のことを私は法則として私自身に設定してきている。すなわち物事は徹底的に吟味すること、そしてしかるべき吟味を経るまでは、信用できるからといって受容しないこと、ありそうもないからといって拒絶しないこと。これは、個体間の共鳴である。なぜなら種間の共鳴があるなら、個体間の共鳴がある (かもしれない) からだ。これはすなわちかつて接触していたか揃った状態にあった物や物の部分においては、武器とその武器による傷の間におけるように、一方から他方への効力が残っているというものである。それについては *unguentum teli* (引用者注：剣に塗布する軟膏) の作用が広く知られており、また豚の脂やニワトコの枝なども、その部分を消耗、腐敗されるならば、それは分たれたもう一方の部分にも作用するというものである。

この表明には、ベーコンによる実験の特徴が示されている。それは、しかるべき吟味を経るまでは信用できるからといって受容しないこと、ありそうもないからといって拒絶しないことであった。このようにベーコンによる実験は、人間の真実の在り方の探究と実践の努力という意味において実験のモラルの側面が強調された実験であった。一方、現代の実験は、例えば広辞苑によると、理論や仮説が正しいかどうかを人為的に一定の条件を設定してためし、確かめてみることである。すなわち現代の実験は、理論や仮説が正しいかどうかを確かめるための実験方法の側面が強調された実験である。

ベーコンによるスピリットと想像の8種類の伝播には、細菌、臭い分子、可視光線、可聴域の音波、静電気、熱、石油揮発物の引火、磁力、引力、重力など現代では生物学的あるいは物理化学的に明確に同定されている自然の過程に加えて、感情と想像の関係、さらには自然魔術とも関わりがある交感と呼ばれるようなより不明確な過程を含んでいる。そこで以下の章においては、感情と想像の関係および交感について検討した。

7. 人の心のスピリットの他者のスピリットへの作用：感情と想像

本章では人の心のスピリット間の作用が生む感情と想像 (SS 986) について検討した。パラグラフの冒頭においてベーコンは次のように述べている。

想像の力と自然の密かな本能の関係は、不確定であるために、それについての結論を下す前に多くの吟味が必要である。

想像の力と自然の密かな本能の関係が不確定であるという表明は、上述したように、人の心のスピリットによる他者のスピリットへの作用が激しいときは、感情の作用となり、また強いときは想像となるという二重の性質があるというベーコンの理解に基づいている。

この不確定さに対するベーコンのアプローチは、まず血縁者間における交感の密かな伝導について検証することであった。そして歴史上、近親者の死に際して人々がそれを心に感じる多くの報告があることを指摘したあと、ベーコン自身の思い出を次のように述べている。

パリにいたときに、ロンドンの父の死の2、3日

前に私は次のような夢を見たことを種々の英国紳士に私は語った。私の父の田舎の家は黒い漆喰で一面に塗りこめられていた (SS.986)。

ベーコンは、自らの夢の経験を再度客観的に記述することにより想像の力と自然の密かな本能による交感が血縁者間で認められることをまず確認した。そしてそれを大親友や大敵の間でも確認した後、それが個人対個人で見られるならば多数者間では想像と感情の結合によってより強力な交感が起こり得るとして、多数例での交感についても確認している。しかしベーコンは、想像の力と自然の密かな本能による交感のそれ以上の分析はできなかった。

どうして夢において近未来を予見することができるのかという疑問にアプローチできるためには、20世紀のC. G. ユングによる意識の相対化を導くことになる客観的な無意識すなわち集合的無意識の発見を待たなければならなかった。夢の主な働きは未来の予知であるという世界にまたがる信念が存在してきたことをC. G. ユングは指摘している。ベーコンの自らの夢の記述はその一例であった。

次章においてC. G. ユングの夢における自然の過程について検討した。

8. C. G. ユングの夢における自然の経過

C. G. ユングの「象徴と夢の解釈 (Symbols and the interpretation of dreams)」⁸⁾における夢の性質に基づいて、夢で死を予知する近親者間の交感における自然の過程を検証した。

1) 夢の予知作用と無意識

C. G. ユングにとって、夢は無意識によって知覚される予知的あるいは予後的な側面を有するものであり、次のように述べている：「知らないのは私たちの意識の心だけである。無意識はすでに知らされていて、もし意識が当該の事実を知っていたならば大なり小なり行ったように、それを注意深い予後吟味に委ねるように思われる。しかしそれらは意識に上らないがゆえに、無意識によって知覚されてその究極の帰結を予期するような吟味に委ねられ得るのである」。上述したように、自然の過程における関係には因果関係すなわち意識の論理による関係のほかに、無意識の共時性 (synchronicity) の関係があることをC. G. ユングは指摘している。夢において無意識が知覚する予知あるいは予後は、因果関係の帰結ではなく共時性の帰結である。

C. G. ユングは無意識が象徴を創造することを次のように指摘している：「有機的構造体と心的構造体の間では本質において相違はない。植物がその花を生産するように、心はその象徴を創造する。」そして象徴については、「ことばやイメージが示したり表現する以上のことを意味するときは象徴的である」と述べている。ベーコンは、夢において黒い漆喰で一面に塗りこめられていた父の田舎の家に父の死を重ねた自らの経験が想像の力によるのか自然の密かな本能によるのかを分離できなかったが、C. G. ユングによると、ベーコンの経験は無意識の心の共時性による象徴の創造である。

2) 夢の代償性

C. G. ユングにとって、夢は代償的な目的に仕えるものであり、無意識の反応あるいは自発的な原動力を意識の心に伝達するものであることを次のように述べている：「意識はあらゆる種類の外的な魅惑物と気晴らしに曝されているので、それは容易に迷わされその個人に不適切な道に従うように誘惑される。夢の一般的機能は、相補的なあるいは代償的な類の内容物を生産することによって心的平衡においてそのような騒動の釣り合いを取ることである。」

夢という自然の過程から意識の想像の力を分離できなかったベーコンは、夢の代償的作用と意識の想像とを分離することができなかったと思われる。

3) 意識の発達

C. G. ユングにとって、意識の発達は不完全なものであり、心の大部分は依然として無意識であることを次のように述べている：「意識の発達は文明状態（いくぶん恣意的に紀元前 4000 年ごろの文字の発明以来と推定される）に到達するのに数え切れない年代を要したゆるやかで苦難の過程であった。その年代以来意識は相当の発達をしたように思われるが、まだ完全からは遠く離れている。」

ベーコンは、古代の神話 (myths) のなかに、Cupid 寓話²⁾ やプロセルピナ寓話¹⁾ のように意識による寓話 (fables) としての哲学的原則を見出した。C. G. ユングは同じ古代の神話のなかに集合的無意識の元型を見出した。

4) 意識と無意識の接続と連携

C. G. ユングにとって、無意識と意識の接続と連携は身体的かつ精神的健康に必要であることを次のように述べている：「一般に心の平衡と生理学的健康の観点からは、意識と無意識は解離するよりも接続してい

て平行線上において移動するほうがはるかによいことであった。」

無意識と意識の接続と連携は、身体的かつ精神的なサーバイバルのために必要である。例えば、低体温症にも熱中症にもならず健康に生き延びるには、まず無意識的であり自律的な生理的体温調節機能の開始が必要である。そしてこの生理的体温調節の早期において、意識による行動性体温調節機能が協働することもまた必要である。人における行動性体温調節は、文化や教育の関与が限定されている本能的な防衛とは異なり、広く文化や教育に負うところが大きい⁹⁾。このように人が寒冷や暑熱の環境において生き延びるためには、進化上先行する生得の無意識的であり自律的な生理的体温調節機能と後発の意識による行動性体温調節機能の接続と連携が必要である。

一方、ベーコンは、個人の思考の再現である想像の力からスピリットによる自然の密かな本能を守ることによって、身体的かつ精神的なサーバイバルを達成するという長生法を提唱した¹⁾。

9. 物と物における交感についての実験： 疣を擦った物を消耗させ腐敗させること による疣の退縮

ベーコンは、疣を何かで擦った後それを消耗させ腐敗させることにより取り去ることは、よく行われている実験であるが、それは自らの経験でもあることを次のように述べている。

私は、子どもの頃から指の一本に疣があった。その後、16歳頃のとくにパリにいたが、1ヶ月の間に両手にたくさんの疣ができた【少なくとも100はあった】。英国大使夫人が、迷信からは程遠い女性であったが、ある日疣を取り除く手助けをしたいと、一片の皮付きのラードを入手し、その脂肪側で疣の全体をこすった後、このラード片を、太陽に脂肪を向けて、南向きの彼女の部屋の窓の支柱に釘付けにした。その成功は次のようであった。5週間以内にすべての疣は消失し、子供のときからの疣もまた消失した。短期間に増えた疣が短期間にまた消失したことには私はほとんど驚かなかったが、こんなに長く私の指にあった疣が消失したことは忘れられない (SS.997)。

この実験については、皮付きのラード以外の緑のニワトコの枝で疣をこすってからこの枝を土に埋めて腐らせて堆肥にすると同じく効果的だといわれているこ

とをベーコンは指摘している。さらには疣ではなく、うおのめやこぶなどの皮膚隆起物で試してみることや、また皮膚隆起物の性質と類似する生きものの部分すなわち雄鶏のとさか、雄鶏の蹴爪、動物の角などを用いて、それらをラードやニワトコの枝でこすってからそれらの一部を切って消耗させたときに、切った残りの部分の消耗に対して影響があるかどうかを見ることができると指摘している。

これらを確認することで疣の退縮を引き起こす交感の特徴をより限定することができるであろう。しかし交感という枠組み自体を検証する実験すなわち疣を何かで擦った後それを消耗、腐敗させないで、逆に維持、保存させたときに疣はどうなるかという実験については、ベーコンは何も語っていない。この沈黙には、実験室の装置・器具等により消耗と腐敗をコントロールすることができなかった当時の実験方法の未熟さに加えて、ありそうもないからといって拒絶しないベーコンのモラルが関係していると思われる。

ベーコンの疣は、指の疣であり、またあるとき多発したことから、それは尋常性疣贅（いわゆるいぼ）であると思われる。尋常性疣贅は、ヒト乳頭腫ウイルス (HPV) 感染によるウイルス性疣贅の一種であり、皮膚や粘膜の微小外傷から皮膚粘膜に侵入した HPV の感染によって上皮幹細胞が良性腫瘍のように増殖して形成される。手足に好発し、しばしば多発するが、自然消退しうるものである。その治療法の中には、接触免疫療法がある。これは、感作性の強い物質を疣に塗布することで炎症を起こすことで、HPV あるいは HPV 感染表皮細胞に対する免疫反応を増強して疣を排除する方法である。またどのような治療法にも抵抗性の症例においては、例えば絶対に治らせる特効薬であると称してビタミン C を内服させるという暗示療法の有効性が報告されている。暗示療法の効果は、治療薬や治療方法に対する期待感や信頼感が関与するものでプラセボ効果と呼ばれている。

日本全国にいぼとり地蔵という民間信仰的な治療法が現存している⁹⁾。この種々の形態がある治療法には、以下の3つの要素が含まれている。①石などの物で擦ること、②ベーコンが述べているような物と物間における交感が示唆されること、③地蔵信仰や神社信仰など信仰に基づいていること。実際の治療法は、以下に述べるように①と③の組み合わせで構成されているものが多い。

物で擦ることについては、小石でいぼをこする；松いぼを借りていぼをこする；タワシでこする；神社のまわりにある石を拾っていぼをこする；ゴマ石を借りていぼをこする；左纏りの縄1本借りていぼをこす

る；お地蔵さんの石でいぼをこする；いぼ神様の石碑にいぼをこすりつけると治る、杉の小枝のいぼでいぼをなでるなどがある。

物で擦ることと信仰の組み合わせについては、いぼ地蔵に祈願しオロシ皿でいぼをこする；左縄をあみいぼをこすり、その縄をいぼ結びにして地蔵さんに掛ける；奉納された稲わらでいぼをこする；観音堂前の椎の古株にいぼをなすりつけて祈る；地蔵の塩をいぼに塗る；地蔵にふりかけた塩をいぼにすりこむ、地蔵さんの軽石を借りていぼをこする、などがある。

ベーコンが述べているような物と物間における交感を示唆するものとしては、供えてある菽の箸でいぼをはさみ、祠のまわりの木に箸をなすりつけるといぼがとれる；ひいらぎの葉でいぼを三度こすり、その葉でえぼ石をこする、などがある。

地蔵信仰や神社信仰などの信仰に基づいているものについては、いぼの部位をさすり、仁王の同じ部位をさする；荒縄で地蔵を縛りあげ「やい地蔵、このいぼを取れ、取れば縄はほどいてやる。もしとらなければもっときつく縛ってしまうぞ」と言い渡す；荒縄でいぼ地蔵をしばりいぼを治してくれたら縄を解くと願掛けをする；地蔵の頭をつけくしで撫で、そのくしをいぼにつける；神様をお願いしてからそばの椀にいぼをこする；こぶ槓の木をさすって願いをかけるといぼがおちる；いぼを木にすりあて「いぼいぼこの木に渡れ」と3度祈る；地蔵の顔を石でこすり、石の粉をいぼにつける、などがある。

いぼとり地蔵の治療効果は、擦ることによって炎症を起こして疣を排除する免疫機構を高める接触免疫療法としての効果および信仰に基づく期待感や信頼感が関与するプラセボ効果によると思われる。

10. 物と物間における交感に触れる実験：剣への軟膏塗布による剣による創傷の治療

この実験についてベーコンは次のように述べている。

傷をつけた武器に軟膏を塗ると傷自体が癒えることが、絶え間なく受け取られ、断言されている。この実験において、信用できる人物による報告として【私自身まだそれを信じることに十分には傾いていないが】以下の点（引用者注：以下の10のポイント）が注目される（SS.998）。

このベーコンが注目する10のポイントは、実験者の恣意性の指摘（第1点、第3点、第6点）、客観的な

記述（第2点、第4点、第7点、第8点）、科学的検証の実践（第5点、第10点）、徳性（virtue）の記述（第9点）の4つに括ることができる。

以下、この4つの括りごとに10のポイントについて検討した。

1) 実験者の恣意性の指摘（第1点、第3点、第6点）

第1点は、軟膏は種々の成分からなるが、そのうちには発掘された死体の頭蓋骨の苔と性行為の最中に殺された猪と熊の脂肪が含まれていることについてである。軟膏の成分のうち「発掘された死体の頭蓋骨の苔と性行為の最中に殺された猪と熊の脂肪」は、最も奇妙であり信じがたいとベーコンは述べ、以下の理由を示している。

この二つについては、私は容易にこれが抜け道として処方されていると疑うことができた。なぜならもし実験がうまくいかなかったなら、獣がしかるべき時に殺されなかったと装われるからである。苔については、アイルランドでは殺害された死体が埋葬されずに積み上げられているので、それが大量にあるのは確かであるからだ。

ベーコン自身まだこの実験を信じることに十分には傾いていない理由のひとつは、軟膏の塗布が無効のときの「抜け道」即ち言い逃れが客観的であるべき処方に巧妙に組み込まれているとの見立てにある。

第3点は、軟膏が特定の星座の下で調剤されていないことである。ベーコンは、それは私の好みであるとコメントするとともに、それは魔法薬が無効のときにそれが適切な天体下において作られなかったという魔法薬の弁解によく使われていると述べて不信感を表明している。これは、第1点と同じく、軟膏の塗布が無効のときの弁解であるとの見立てであるが、魔法薬が無効であったときの当時の自然魔術の言い逃れの常套手段であったことを示している。

第6点は、凶器の剣が見つからないときには、凶器とよく似た鉄あるいは木の道具を傷に入れてそのために出血したあと、その道具に軟膏を塗布することが役に立って有効であることである。この道具についてベーコンは、多くの場合凶器が見つからないために、この奇妙な形態の治療を要求され使い続けるための道具に違いないと思うと述べている。

2) 客観的な記述（第2点、第4点、第7点、第8点）

第2点は、凶器に塗布する軟膏は傷自体に塗布して

も効果を示さず、武器に塗布して効果があらわれることである。これは、傷に塗布すると効果がある軟膏を傷つけた凶器に塗布することではなく、傷に塗布しても効果のない軟膏が凶器に塗布されていることの指摘である。

第4点は、傷を負った人とは遠く離れているときにも武器に塗布されることである。

第7点は、傷は最初に清潔な白ワインあるいはその個人の水で洗わなければならないこと、それから上質の亜麻布でしっかりと巻きつけること、そして健全になるまでもはや包帯は交換しないことである。この傷の手当についての客観的な記述は注目に値する。なぜなら、後述するように、現代医療における湿潤療法という創傷管理に相当するように思われるからである。

第8点は、剣（凶器）自体は軟膏の及ぶ限りしっかりと包んで、風を当ててはいけないことである。

3) 科学的検証の実践（第5点、第10点）

第5点は、傷が癒えた人の想像は必要でないと思われることである。なぜならベーコンは、傷を負った人は、軟膏で武器が拭われたことを知ることなく、また武器が軟膏で塗布されるまで激しい痛みにあったことを挙げているからである。

第10点は、それは人だけでなく動物も癒すことである。この点についてベーコンは、それは主題を容易な試行に従わせているからという理由で、他のすべての点よりも好むと述べている。

4) 徳性についての叙述（第9点）

第9点は、軟膏は剣から拭き取って保存したなら再使用すること、そしてそれはむしろ徳性を増すことについてである。

次に、このベーコンが注目する10のポイントのうち、とりわけ第7点と第9点について、現代の医学のレンズを通して検証した。

5) 第7点における創傷管理と湿潤環境

第7点の創傷管理についての客観的な記述は、現代の創傷管理における湿潤療法に相当すると理解して矛盾がないか否かについて検討した。

従来、傷は乾燥させた方が感染リスクは減少して治癒が促進されるとの考えから、傷の消毒とガーゼによる被覆と頻繁なガーゼ交換からなる創傷管理法が長い間行われてきた。しかし湿潤環境下の創傷管理の方が、乾燥環境下の創傷管理よりも上皮化が早期に進行することが実験的に検証されたことから、生理学的に

湿潤な環境で管理する湿潤療法が現在では広く受け入れられている。

湿潤療法で効果的に皮膚創傷の上皮化を促進するためには、湿潤環境の維持、滲出液の管理、創感染の制御が必要である。第7点の「(剣による) 傷は最初に清潔な白ワインあるいはその個人の水で洗わなければならない」は、創感染の制御法として機能していたと思われる。なぜなら創傷を水で洗い流すことは現代の創傷管理の基本であり、また剣による創傷は細菌感染の危険を高くする土などで汚染されることが少ないからである。第7点の「それから上質の亜麻布でしっかりと巻きつけ、そして健全になるまでもはや包帯は交換しない」は、湿潤環境の維持法および滲出液の管理法として機能していたと思われる。なぜなら上質の亜麻布でしっかりと巻きつけて治るまで包帯交換をしないことにより湿潤環境が維持され、また剣による創傷は急性創傷であるため、褥瘡などの慢性創傷と比較して滲出液は少なく、ガーゼ交換の必要がなかったと考えられるからである。

このように剣への軟膏塗布による剣による創傷の治療についての実験における自然の過程は、物と物の間の交感ではなく、創傷に対する湿潤環境の形成であると理解することができる。

6) 第9点の徳性の増加とプラセボ効果

剣に塗布した軟膏の再使用による徳性の増加は、プラセボ効果と理解して矛盾がないか否かについて検討した。

第9点における徳性は、個体間の交感を増す軟膏の徳性であることから、再使用した軟膏によって、個体間の交感の効力を増すことと理解できる。ベーコンは、第9点については何もコメントしていない。しかしこの実験における剣に塗布した軟膏の再使用による徳性の増加は、軟膏自体の効力の増加ではない効果すなわちプラセボ効果と理解することができる。なぜならプラセボ効果には、治療薬や治療手段に対する期待感や信頼感が関与することから、もし受傷者が物と物の間における交感を信じていてかつ使用する軟膏が効果のあった軟膏であること知らされているなら、プラセボ効果をより一層高めることになるからである。

プラセボ効果は、意識ではなく無意識を介した効果であると思われる。上述したS. W. ポージェスのポリヴェーガル理論によれば、人の神経系は、体内外の環境のリスクを意識的自覚とは独立して、無意識の脳覚 (neuroception) と呼ばれる無意識的な評価を行っている。そして無意識の脳覚による安全、危険、生命への脅威の汲み取り (無意識的知覚) に応じて、適応反

応の表現が規制されている⁴⁾。無意識の脳覚が安全を汲み取ると、適応行動として哺乳動物で発達した有髄迷走神経の機能による社会的関わり行動が可能になるとともに、生理的状態の改善と社会的支援をもたらす。治療薬に対する期待感や信頼感は、無意識の脳覚による安全の汲み取りをもたらすために、適応行動として社会的関与行動を可能にするともに、生理的状態の改善と社会的支援をもたらすことで、プラセボ効果をもたらすと考えることができる。

11. おわりに

“シルバ・シルバールムすなわち自然誌”の10世紀における交感に触れる実験においてベーコンが実践したことは、神の仕業および神のランプである感覚に基づくことにより、迷信と魔法のアートと観察から、明晰で純粋な自然の過程を分離することすなわち外的環境に関わる外的な自然の過程および人の内部環境に関わる内的な自然の過程を分離することであった。しかしベーコンが分離した人の内部環境に関わる内的な自然の過程には、C. G. ユングが同定した集合的無意識やS. W. ポージェスの無意識の脳覚のように意識を相対化する無意識の過程が含まれていなかったために、ベーコンは自然の過程において意識に属する想像の力と無意識に属する自然の密かな本能を分離することができなかった。

しかしながらベーコンは、物事は徹底的に吟味すること、そしてしかるべき吟味を経るまでは、信用できるからといって受容しないこと、ありそうもないからといって拒絶しないことを自らの法則として自らに設定するとともに実験者の恣意性の指摘、客観的で正確な叙述、科学的検証の指摘を厳格に実行することにより、現代の医学、生理学、心理学のレンズを通しての検証が可能な客観的記述としての自然の過程を後世に遺すことができた。

引用文献

- 1) 藤井義博. フランシス・ベーコンのスピリットの視野—想像の力からスピリットを守ることによる長生—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 16(1), pp.31-43, 2021.
- 2) 藤井義博. フランシス・ベーコンによる Cupid 寓話の解釈と彼の物質論の視野: スピリット論の形態の物質論を礎とした長生法の現代的意義. 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 15(1), pp.25-35, 2020.
- 3) A N whitehead. Science and modern world: Lowell Lecture, 1925. The Free Press, NY, USA, 1967, p. 42.

- 4) S. W. Porges, *The Polygonal Theory: Neurophysiological Foundations of Emotions, Attachment, Communication, and Self-Regulation*. W. W. Norton & Company, NY, 2011.
- 5) Stephen Gaukroger. *Francis Bacon and the transformation of early-modern philosophy*. Cambridge University Press, New York, NY, p. 212, 2001.
- 6) C. G. Jung. VII. Synchronicity: An acausal connecting principle. In *The Collected Works of C. G. Jung Vol. 8. The structure and dynamics of the psyche*, translated by R. F. C. Hull. Princeton University Press, Princeton, N. J, pp. 417-531, 1969.
- 7) C. G. Jung. *The Collected Works of C. G. Jung Vol. 9, Part I The archetypes and the collective unconscious*, translated by R. F. C. Hull. Princeton University Press, Princeton N.J., 1968.
- 8) C. G. Jung. II. Symbols and the interpretation of dreams. In *The Collected Works of C. G. Jung Vol. 18. The symbolic life*, translated by R. F. C. Hull. Princeton University Press, Princeton N.J., pp. 183-264, 1980.
- 9) 藤井義博. 医学とスピリチュアリティ—ベストケアを目指して—. *スピリチュアルケア研究*. 3, pp. 1-12, 2019.
- 10) 平松 洋. *いほとり神様・仏様 (第2版)*, 羽衣出版, 静岡, 2006.

**The perspective of the experiments touching sympathy in
Francis Bacon: examination of natural processes through the lenses
of the contemporary medicine, physiology and psychology.**

Yoshihiro FUJII
(Health Center, Fuji Women's University)

